

華僑・華人らしい生き方



コラムニスト・アジアソウオッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

久しぶりにベトナムに行った。首都ハノイから、あの林芙美子の「浮雲」で知られるダラットという高原の避暑地へ向かった。以前はバスで何十時間もかかっていたようだが、今ではベトナム国内にも格安航空会社が飛び、料金も安く、時間も2時間弱で着いてしまった。ベトナムもどんどん進化している。

ハノイやホーチミンにいる知り合いの台湾人から「ダラットに行くなら友人を紹介する」と言われ、二つの場所を急ぎよ訪れた。

最初に行った呉さんの所は、空港から30*ほど離れており、道はでこぼこで、車に乗っていても尻が痛くなるような場所だった。周囲はベトナム名産のコーヒー畑が広がり、その中でたった一軒、茶業を営んでいた。

なぜそのような辺ぴな所へ来たの

か聞くと「いやあ、母親が花の栽培で来ていたから」と言うではないか。彼がそこに来てから約20年、環境はかなり良くなったとはいうものの、まだまだ台湾の比ではない。しかも、本人はもともと茶業関係者でもなく「台南で火鍋店をやっていた」というから大転身だ。

現地で華人の奥さんをお願い、その兄弟に手伝ってもらい、茶作りをしている。「なぜここで茶業なのか」と聞くと、「台湾高山茶がブームで儲かりそうだったから」と、のんきなことを言う。

自分がやったこともない事業を知らない土地で始めるなど、日本人では到底考えられない発想ではないか。「とにかく台湾は煩わしい。この環境が気に入っており、老後もここで暮らすつもりだ」と屈託がない。

もう一人の韓さんの所は道もよく、

周囲に茶畑が広がっていた。やはり20年前にそこにやって来て、奥さんをホーチミンで見つけて、共にそこで茶業を興した。彼もまた、台湾では不動産業などを営んでおり、茶業とは無縁だった。

奥さんの兄弟ともうまく折り合いをつけて、茶業を成功させてきた。「知らない土地で成功する秘訣は現地人とうまくやること」とサラフと言うが、当初は苦勞の連続であったろうと想像する。

韓さんの近所に住む張さんも同時期にそこに入り、花の栽培で成功していた。田舎ではあるが、素晴らしい家に住み、美味しいものを食べて楽しく暮らしている。最近大病を患ったが、それでも台湾に帰るつもりはサラサラないと言い、その日もバイクで花農園の見回りをしていた。

華僑と華人、その違いは「現地の

国籍を取り、現地人になるかどうか」と聞いていた。国によって制度が違うので一概には言えないが、華僑はビジネスチャンスを目指して渡っていく人、華人は国籍を取得しそこで骨を埋める覚悟の人だろうか。昔は交通が不便だったので、一度渡ったら二度と故国の土は踏まないという覚悟だったと思うが、今は簡単に行き来ができるので、その定義は不要かもしれない。

「世界中にチャイナタウンがあるのは、中国人が現地に溶け込まないから」という意見もあるが、今回の例を見ても、特に東南アジアのように反中感情もある場所では「個々人は現地に溶け込みビジネスを進め、困った場合は華人ネットワークの相互扶助」というのが現代の図式かな、とも思えてくる。